



石川雅望集

全

昭和九年二月五日印刷
昭和九年二月八日發行

有朋堂文庫
石川雅望集
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京市淀橋區西大久保町二丁目二百三十六番地

印刷兼
發行者

三浦捷一

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

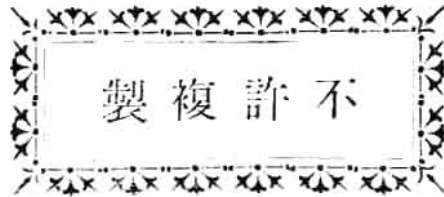
合資
有朋印刷社

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地



不許複製

緒言

石川雅望の述作中最も主要なるもの六種を擇び、題して『石川雅望集』といふ。

石川雅望は江戸の人、畫家石川豐信の子にして、字を子相、通稱を五郎兵衛といひ、六樹園と號せり。狂名を宿屋飯盛といふ。其始め旅館として相當に有福なりしが、後其筋の嫌疑を受けて江戸拂となり、多摩郡府中に住し、後には居を内藤新宿さては靈岸島に卜して、狂歌の點者をなしつゝ、深く心を和學の研鑽に潛め、純粹の國學者としても、源註餘滴、雅言集覽の如き、堂々たる著述少なからず。而もその最も認むべき一大特色は、甚深なる和學の造詣を戲文の上に傾倒して、巧に優雅艷麗なる擬古の文字を行ひ、和漢の故事名文を操縱して、當時の人情風俗を描寫し、又狂歌狂文小説等を作れる點にあり。今本書に採録したる六書の略解題を示す事左の如し。

近江縣物語は、藤原の保輔、同齊光といへる大強盜に配するに、佳人蘭生、才子梅丸、さてはその戀仇常人を以てせる一篇の物語にして、其序文には、近江の閑居にして一老人の

語れるまゝを記録せるものといひ、夙高亭高行の跋文には、其名蓋し萬葉集の「青みづらよさみの原に人もあはぬかも石走る淡海縣の物語せむ」といふ歌に取れるならんといへり。文平明典雅にして愛誦すべし。

飛驒匠物語は一代の名工墨繩の技術の幾多傳奇的なる話説に配するに、仙界より人間に下生せる一少年と一姫宮との戀物語を以てせるものにして、その戀物語の材料は、自序に言へるが如く、専ら竹芝寺の緣起に取れるが如し。文の優麗なること前者に優れり。

しみのすみか物語は今昔物語の類に倣ひ、幾多の奇聞、逸話を彙集したる小話集にして、内容變化に富み、文また擬古文としての妙を極めたる物といふべし。

都のてぶりは一種の隨筆にして、江戸の人情風俗を味ふべき絶好の文字也。

吾孀那萬侶は彼が狂文の集にして、宿屋飯盛としての雅望の技量を窺ふべきもの、その古今の故事名文等を巧に點綴せるは、彼が最も得意の壇場とする所なれども、其これあるが爲めに創作的色彩の乏しきを致し、此種の文に最も必要なるべき圓轉洒脫の妙味に缺くる

吉原十二時は二六時中に於ける遊客遊女の姿態を描寫せるものにして、其各時に於ける特色を概叙し、次に作者の選に係る幾多の狂歌を載せ、各巻軸に自作一首を掲げたるもの也。徳川平民文學に交渉する所最も多大なりし北里の情景を窺ふべく、最も恰當なるものの一也。

大正四年五月

校訂者 塚本 哲三

石川雅望集 目録

近江縣物語

一一八

卷之一

ふなをが	七
せいがいは	三
すのまた川	元

卷之二

くさまくら	三
山のとれ	四

卷之三

ひばぎのうひ山ぶみ	六
いもがしら	七

卷之四

ふくろのうば	八
--------	---

卷之五

石山寺	一〇
田村將軍	一一
うどんげ	一二

飛驒匠物語

一二五

卷之一

すみなは	一四
蓬萊の山	一五

卷之二

たけしば	一七
ひるをが	一七九

卷之三

いしばま……………二六
うきふね……………二〇八

卷之四

よめの君……………二八
夢のたぐち……………三二
都のぼり……………三四

卷之五

ひきもんでん……………二五
よめの法師……………二五
せたのはし……………二六

卷之六

から猫……………二七

しみのすみか物語

二五—二六

上

あじろ車……………二八
強盜袴垂醫師盛之が家に入る事……………二九
菅原孝標の隣なるげすの女の事……………三〇
通俊卿の家の女童の事……………三一
修行者人を救はんとする事……………三二
侍の妻男に遺言する事……………三二
文章生行兼五節のまねびする事……………三三
大和國山寺の兒の事……………三六
毘沙門天窮鬼を逐ひ給ふ事……………三六
商人門を飛び越えて家に入る事……………三七
大鼻某栗栖野にて美女に遇ふ事……………三八
えせ侍の酔ひしれたる事……………三九
鐔あきなふ男の事……………三九
遊女放屁せる事……………四〇

商人茶碗を碎く事	三二
受領の子乞兒を斷る事	三二
信太森の狐の事	三四
博打吉祥天を祈りて福を得たる事	三五
義清放屁せる事	三六
あしかの局殿居の事	三九
美濃國の老夫婦わかがへる事	三〇
常陸介の北方の事	三二
宮司父子愚痴なる事	三三
えせもの讃酒歌を思ひ違へし事	三三
郡司禁酒の事	三三
博打河豚を食ふ事	三五
兵藤太が妻密夫にあふ事	三六
色好の男簾の際より女を見る事	三八

下

家司壺なる結果をとらんとする事	三二
-----------------	----

陪從春近下部に雪佛を作らする事	三三
價二百兩せる柑子の事	三三
大進有恒が妻閨王の廳に訴ふる事	三四
餅を買ひて捨子を拾ふ男の事	三六
虱をもてあそぶ翁の事	三七
紀直方兄弟の子を論ずる事	三八
宮司と法師鬭諍におよべる事	三八
桶工暴風をよるこびし事	三九
家乏しく成りたる男を妻いさむる事	四〇
文字しらぬ男出家せる事	四〇
大太郎弟子を教ふる事	四一
戀やみし給ふ姫君の事	四二
人宿して物とらんとせる女の事	四九
かたなり博士につきて書借らんといふ事	五〇
越前守が下部水仙花を愛づる事	五〇
未央宮の瓦硯重寶とする事	五二

北面實持人をとぶらふ事	三三三
贅しき人從者を雇はんとする事	三五四
椿市の宿りの事	三五四
琵琶法師夕立に逢ふ事	三五五
竹垣をくぐりて首出でざりし男の事	三五五
袴著の姫君をいさむる乳母の事	三五七
學生源の廣が家の童の事	三五八
檢非違使の下司となりたる人の事	三五九
某入道の童柳をまもりたる事並童藁	三五九
に臥していれたる事	三六一
丹後國の痴人龍宮に行きたる事	三六一
都の手ぶり	三六七—三九四
とみ澤の市	三六九
兩國の橋	三七二
ばくろの町	三七八
やくし堂	三八五

狂文吾孀那萬俚

三九五—五〇六

上

よたか	三八七
いかのぼり	三九七
狂歌伊勢海序	三九八
花の屋道賴會集	三九九
狂歌細見記序	四〇一
げいしや	四〇一
狂歌勸進帳	四〇四
灸	四〇四
吳竹根春が手鑑序	四〇七
草子此主狂歌帖序	四〇八
狂歌買出帳	四〇九
はつ磯五郎が墓	四〇九
紺忠新宅勸化帳序	四二一
吉原細見記序	四二二

柳を詠めるざれ歌のほし書 四二三

青山集 四二五

詠ニ梅花ニ狂歌會序 四二七

狂歌玉笹集序 四三〇

巴扇堂昔語狂歌集序 四三一

放 屁 四三二

音成をおくる詞 四三五

馬蘭亭狂歌會序 四三六

四谷新宿 四三八

新驛狂歌會序 四三九

くはせ物 四三〇

天 命 四三二

春雨を詠めるざれ歌のほしがき 四三三

烏亭焉馬六十賀 四三五

櫻をめづる詞 四三六

醜女の贊 四三八

年中行事 四三八

下

三千丸が家の記 四四一

丸屋が新宅 四四二

古渡を送る詞 四四三

狂歌萬代集序 四四四

狂歌集會式 四四五

梅芳軒八景 四四七

鯛屋が櫻の間 四四八

七小町の屏風 四四八

杏花園先生六十賀 四四九

尙左堂を送る詞 四五二

鶯谷のさくら會 四五三

人の六十賀につかはしける文 四五四

出雲國の人々よりおこせける狂歌集

のしりへに書ける詞 四五五

鯛亭記 四五五

天王行燈	四五六
殘月堂記	四五七
贊酒詞	四五八
酒をいましむる詞	四五九
さくら會	四六〇
醉龜亭酒百首	四六二
なんだ樓	四六三
妙閑信女十七回忌祭文	四六四
便々館狂歌集序	四六四
狂歌太郎百首序	四六五
九月十五夜正齋につどひて月を見る詞	四六六
三浦大介が繪	四六七
禪中庵	四六八
いけ花	四六九
四睡の圖	四六九
春鹿樓が蕎麥をめぐる詞	四七一
茶	四七三

雪	四七四
龜	四七五
雛あそび	四七六
不朽堂	四七六
三友園	四七八
三陀羅法師會集	四七九
新吉原細見序	四八〇
馬蘭亭狂歌帖跋	四八一
深見翁年賀集序	四八二
虱	四八三
川柳集序	四八五
かつをぶし筥	四八六
玉光舍	四八六
七葉亭	四八七
ゆふがほのもとに夫婦すゞみ居る繪	四八八
蕎麥屋の引札	四八九
越後國白根諏訪明神祭禮奉納の額	四九〇

吉原十二時

五〇七—二六

未時	五七九
午時	五五九
巳時	五四一
辰時	五二八
卯時	五〇九
番頭の異見法事	四九七
鍾馗の贊	四九六
ほどの繪	四九五
西行忌	四九四
雲茶集序	四九三
瓜	四九二
福祿壽の頭を大黒の剃る繪	四九一
朝妻舟の繪今様の體にならふ	四九〇
蘆葉達摩	四八九
淺草庵詠梅狂歌會序	四八八

申時	五九四
酉時	六一一
戌時	六三〇
亥時	六四九
子時	六六三
丑時	六八一
寅時	七〇〇

目
錄

近江縣物語序

ひとよせ近江國にまかりて、月ごろとどまり居りけるに、山里ながら小家たちならびて、訪ひ來る人すくなからず。折りから秋雨しめやかに降りてさうぐしかりければ、旅のあはれも例ならず覺え居たるに、人々入り來てうち語らふ。いづれもくこちなくかたはなる事のみさへづり言ふめれば、聞き入るべうもあらぬなかに、いとく神さびたる翁のあぐびうちして、かたへに寄り居て、斯くいひくゝの果々はとうち誦したるが、何となく恥かしけなれば、翁のわたりにくそ興ある物語は侍るめれ、すこし宣はせよといへば、などてか年老いくちて侍れば、何事も皆わすれて侍り、その中に、むかし此國の縣におはしける人の、御みづから書きのこし給へる書とて、近き頃まであたり近き御寺にくそ傳へて侍りしか。此寺焼けて後は、片はしをだに聞き知れる人も侍らず、たゞ翁のみその仔細は知りて侍りといふ。打聞くよりわりなうゆかしさ添ひて、さし寄りてそよのかせば、翁すけみたる口ひどらかして、かの雲林院の菩提講にまゐりあへりし翁どものまねびせんも、か

たはらいたく痴がましけれど、御とぎにさぶらひて、口ふたけてあらんも不用に侍るめれば
と言ひつゝ、柿しぶに染めたる團扇ふたくと打ちつかひて、そもくとなよかし出で
たる かれ聲にてしはぶきがちなるも古代なる物から、さすがに節々とりどころある心地
すめれば、やがてふところ紙取出て、だみ言のまよに記しつけつ。此頃某のあるじ來り
て、めづらかなる物語書きつどり與へてよと乞ふ。ことさらに筆とらんも物憂くて、此ふ
みとり出でて遣しつ。いかに聞きひがめたる誤ども多かりなにかし。

六 樹 園